

昭和55年7月1日第3種郵便物認可
平成16年7月1日発行(毎月1回)1日発行
俳句雑誌 第25巻第7号

俳句雑誌「おき」

沖

7月号



沖
発行所

弘法麦の秋

林 翔

老人と写真

昨年十月、「俳句朝日」編集長の越村隆一氏から電話があり、一月号に写真を載せたいとのこと、撮影には十月十四日、カメラマンと助手を伴って来られた。生憎小雨が降ったり止んだり天気なので、大野の万葉植物園での撮影は諦めて、家の中や庭の中と、近くの散歩コースでの撮影だが、一月号が届いたのを見ると、B5判の同誌に「長寿万歳林翔さん」と題して五頁の特集であった。写真五葉と俳句二〇句で、他に編集長の小文も添えられている。

サーファ―のかくも細身に太平洋
松の芯伸びきる太平洋の空
十四日の撮影から間もない頃、今度は角川書店の「俳句」編集長海野謙四郎氏から電話があり、一月号に写真をとることであったが、「俳句朝日」のことを話すとひどく残念がり、「では五月頃をお願いします」と言われた。

松の芯上総の空の青を知る

「俳句」誌の企画は一月号に始まり、例えば三月号では、大牧広氏と

雲湧きつ去りつ弘法麦の秋

淵上千津さん

浜風に夏コートひらめかす人

降る雨を重し重しと紫陽花は

鷺舞へば植田に歓喜ありにけり

風の青蔓もう探ること止めなさい

うかど書を閉ぢて羽蟻を死なせけり

山下知津子氏がベアになっている。私は誰と組むのかと思ったら、徳田千鶴子さんと御一緒にと言われた。千鶴子さんは、「馬酔木」主宰水原春郎氏の令嬢で、秋櫻子先生の孫に当られ、「馬酔木」同人でもある。

五月二十四日は快晴であった。午後一時半、市川駅で海野氏・徳田氏及びカメラマンと落合い、先ず真間山弘法寺へ。ここには秋櫻子先生の梨咲くと葛飾の野ほととのぐもり

の名句が碑になっている。この句碑をバックにして撮影、更に江戸川べりに行つて何枚か撮影された。この日に詠んだ五句も「俳句」誌に掲載されるといふことで、目下推敲中。

林 翔



内子

能村 研三

なつかしい原稿用紙

良き草と絡まつてゐる蛇苳

一睡に吾を失ふ籐寝椅子

松山

小満や旅で借りたる自転車に

子規ばかり讚ふる町に梅雨兆す

毎月の「沖」や新聞の評など全ての原稿は、パソコンを使って、それを即、印刷所や出版社へメールに添付して送っている。少し前までは、ワープロ原稿をフアクシミリで送っていたが、時代の変化に伴って、それに合わせるような対応が迫られている。確かに、このシステムは便利で、もう後には戻れなくなってしまうが、時代に馴らされていく自分に気付くと恐ろしくなる。

昔は原稿用紙の樹目を一字一字埋めていったが、今ではその頃がなくなしい。推敲していくうちに何度も消しては書き加えたり、朱筆を入れたりして、一つの原稿ができあがった。パソコンで原稿を作れば、どんなに推敲しても、その汗の結晶の部分は残らず、清書された原稿だけが残る。しかも印刷所や出版社に送られた原稿は、かつてのような植字工の手を経ず、原稿そのままが入力され、極めて合理的な処理がなされる。私の職場でも、朝出勤するとまず最初に、それぞれのパソコンにスイ

熟田津の片陰道を選びて来し

木蠟の商人屋敷夕涼し

内子座四句

内子座の内木戸くぐる薄暑かな

内子座の点床ちよぼゆかのぞき梅雨じめり

夏座布団六十四の棧敷かな

囃子方待つ御簾内の燈涼し

ツチを入れてメールの受信をチエツクする。昔のように紙に書かれたお知らせが回ってくることもなく、自己責任においてそのメールからのお知らせを見るのが日課である。職場の大半の人が、黙々とパソコンに向かっている姿はある意味で無気味で異常な世界でもある。

先日、文化会館で井上ひさしさんの文章講座を企画したが、井上さんが開口一番言ったことが、この講座の三日間はワープロやパソコンから離れて、原稿用紙の使い方を勉強してほしいと言われた。確かに、パソコンやワープロで書いた原稿からは字間、行間から溢れ出る息づかいが伝わってこない。余りにもいろいろな事が便利になって機能的にはなるが、人間に何かが失われていくように思えてならない。

能村研三



蒼茫集



滝行者

松本圭司

滝に入り行者たちまち滝となる
夏瘦せてぎらりと若さ取り戻す
安房はいま雄どき勇みの鯉来る
初がつを父の思ひ出みな重き
青春の形見とさくら貝拾ふ
春星や光年といふ夢の距離

象きさ
谷だに

東條未英

飛花落花洗濯日和続きけり
村の子の挨拶上手葱の花
ランドセル鳴らして葱坊主日和
象谷の奥より聞え初蛙
象谷の水はきらきら蝶の恋
ぼつかりと竹生島泛き鳥の恋

小 筍

北川英子

樹の洞にしかと雛声みどりの日
生涯の節を蔵して小筍
誰が供花か墓所に鮮し春母郷
糠床に女系脈々茄子胡瓜
玉の緒の点滴管へみどりさす
卯波立ち灯台の白少し老ゆ

余り苗

松井のぶ

惜春の椅子になりたる石ひとつ
あしかびの含羞のいろおびただし
ひろびろと植糸終止符の余り苗
逃水のいざなふ方や九十九里
よそ者に波百態の青あらし
五月闇なんじあもんじあの唸りご糸

潮鳴集



南風岬

松井志津子

春田打つ島のやうなる古墳背に
峡の田のひかり湛へて田植待つ
灯台が天へ翔ちさう南風岬
風五月少女となりて渚駆く
サーファアのすつくと立てる波の尾根

逡巡

鈴木夫佐子

万緑に真向きて思はざる泪
逡巡やまだ柔らかき草引きて
鶏のみじかく鳴くよ露の雨
飛の台遺跡二句

日の目見し炉穴の焦げ目風光る
炉火跡のたつきの温み垣間見ゆ

一斉蜂起

中島あきら

麦の穂の一斉蜂起北へ北へ
母の日や仏飯うすうすと乾き

一書成る

望月晴美

みどりごの耳のくれなゐ柿若葉
水木咲く天に華燭のあるらしく
風船の数だけ親子鱗鱗の空
一書成り更に期すもの初桜
はつ夏の星と交信浜泊り
文豪の熱き文読む風五月
黒ビール飲みし昂ぶり知らるまじ
夏海へ溶けこみたるよ空の紺

山躑躅

杉本光祥

アルプスの遠嶺ぼかしに桃の花
きのふ雪けふ花舞へり角館
もう一度我也燃えなむ山躑躅
代掻きて上総の空を大きくす
卯波立つ真砂女の句碑は生家向き

沖作品



能村研三選

桜どき五彩溶く皿父のもの

石川 中野 了一

ふるさとに戻る遊年花こぶし
まほろばの風をとらへて夏ひばり

和讃子に繋ぐこころ根松の芯
到来のたかなづくめ酔吟す
蝶に空譲りて深き椅子にあり

千葉 林 昭太郎

風鳴りの果の錆色白木蓮
考への眉間を蹴つて初燕
山国は鱗の荒し鯉のぼり

麦秋の指舐めて繰るマタイ伝
桜九十五度目の母と小さき旅

茨城 内山 花葉

かたかごの万花へ日本海の風
浜防風囀めば故郷の海鳴りす
牡丹に崩るといふ豪華さも

とろとろと五月の夕日田水張る
しやぼん玉光に死角なかりけり

長野 矢崎すみ子

千年の命の息吹御柱祭
御柱祭動の祈りの烽火上ぐ
爛熳の花の奥社の透かし彫

その奥の空真青なる夕桜
てふてふの愁ひの翹をたたみをり
麦笛を吹く海へ吹く畔へ吹く

傷口に脈のあつまる夜の新樹
はつ夏の潮をなだむる滯つくし
手話の手のひらひら辛夷咲くやうに

東京 中尾 公彦

万葉の仮名も瀧のゆふべにて
初鯉藁火で焙る浜料理
桜桃忌くる青写真に誤差すこし

衣更して人の世を簡潔に
海猫翔びてみちのく色と思ふなり
一切を白にやすらふ袋掛

小康の身に薫風の来て憩ふ

齊藤 實

福嶋千代子

先生は怒るがよかり桜東風
茨城 今瀬 一博

洗顔の水を散らして新樹光
高くたかく揚ぐるや次子の鯉のぼり
父情まだ芽生えしばかり藤の花
観覧車の円周に居り春うらら
市川市 内山 照久

蝌蚪の群遺伝子の粒うごめきて
夜桜や背負ひし闇の深かりき
夕膳の母の座に居て春惜しむ
羽抜鶏にはか農夫を突つきけり
大樽に生るる張力種浸す
東京 石川 笙児

ほぐれゆく筑波山の雲や代田澄む
さみだるる濠に木の橋石の橋
なれ鮎や湖北に残る京言葉
鮎挿して生活の湖の舟子溜り
愛知 三好 智子

志士の息残る臈の京町屋
矢車の孤高に回る散居村
孤独てふ大きな自由桜の夜
茶房からジャズの音洩るる夏隣
市川市 岡本 崇

船笛に剪定鋏とまりけり
手作りのピザは薄型夏を待つ
花満ちて高き門扉の大使館
千葉市 佐々木よし子

浦安に雲湧きやすし夏隣
うららかや常陸訛の促音便
夕づきて風みづみづし梨の花
狼藉のやう葉を散らす竹の秋
中村 清志

葉桜や往生際のよき摂理
黄泉のちははほどの螢火か
山気溶く湖夏のソナタかな
一鞭に馬かがやけり朝桜
東京 坂 ようこ
水槽をつつくささ魚春の風邪
蝶生れてまだ蜜知らぬ白さかな
小指から塗る爪八十八夜寒
春の虹西の京より斑鳩へ
神奈川 堀口 希望
天草の墓標縫ひゆく初燕
読み返す先師の句集明け易し

新人賞予選句（七月）

桜どき五彩溶く皿父のもの
山国は鱗の荒し鯉のぼり
中野 了一
桜九十五度目の母と小さき旅
林 昭太郎
御柱祭動の祈りの烽火上ぐ
内山 花葉
麦笛を吹く海へ吹く母へ吹く
矢崎すみ子
手話の手のひらひら辛夷咲くやうに
中尾 公彦
福嶋千代子
衣更して人の世を簡潔に
齋藤 實
先生は怒るがよかり桜東風
今瀬 一博
観覧車の円周に居り春うらら
内山 照久
大樽に生るる張力種浸す
石川 笙児

沖作品 選後句評

*
能村研三

桜どき五彩溶く皿父のもの 中野 了一

中野了一さんは、沖での俳歴も古く、昭和六十三年が初投句で、すでに『加賀五彩』という句集を上梓された方である。五彩とは「加賀五彩」のことで、友禅染の伝統の臙脂、藍、紫、黄土、緑の五色を基調として、草花模様を描かれしつとりとした色合いを出している。この句に出てくる父というのも、作者の岳父で、加賀友禅の技法を伝える工芸家として活躍された能川光陽師で、平成八年に九十六歳で亡くなられた。加賀友禅の絵付けの工程は下絵、糊置きが済んだものを彩色するが、微妙な色合いを出すには、絵皿でいろいろな色を混ぜ合わせる。色をくすませたり、薄い色を出したり、何度も繰返して色を作っていく。加賀友禅には、淡い桜の色にも似た独特の色合いで絵付けをしたものもあるが、特に桜の季節になると、父の卓越した技と雅な世界が思い出され、父の偉大さに改めて尊敬の念をいだいた。

山国は鱗の荒し鯉のぼり 林 昭太郎

林昭太郎さんは、昔沖で活躍した人で、復帰後多くの句会に参加して、徐々に昔の勘を取り戻されているようだ。この句、山国など田舎の鯉のぼりが都会の鯉のぼりと違って、やや粗野に出来ているわけではない。鯉のぼりの鱗の部分も、ものによつては、鱗が小振りであったり、大柄であったりもするが、そんなに大きな違いはない、ただ一つ違うのは、その背景となる山国の景色である。せせこましい都会の町で泳ぐ鯉のぼりとは違って、青々とした山河を背景に悠々と泳ぐ鯉のぼりは、生き生きしていて、鱗までもが大ふりで荒々しく見えた。

桜九十五度目の母と小さき旅 内山 花葉

日本人にとつて、桜の花はある意味では心の拠り所なのだろう。桜が咲く頃になると、開花予報とか桜前線が日本列島を北上中などとテレビや新聞で報道される。つくづく日本は平和な国である実感できる瞬間でもある。作者のお母様は九十五歳を迎えられたのであろう。高齢な母が一年一年、年を重ねていくのを子供としても素直に喜ぶと共に、日本人として生れて九十五度目の春を迎え、今年も桜を愛でることができた喜びは一人であるのだ。桜を見せに出かけた小さな旅と一緒にできた喜びが読者にもひしひしと伝わってくる。